

平成 28 年 10 月 25 日

大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の実施時期について

全国高等学校長協会会長

宮本久也

現在検討されている記述式問題の導入を含む「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の導入意義については、本協会としても理解しているところである。その上で、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の実施時期について、高等学校教育の現状、今夏に実施したアンケート調査結果等を踏まえ、以下のような提案を行う。

【提案内容】

大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の実施時期を、現行の大学入試センター試験と同程度の時期（1月）としていただきたい。

【提案理由】

1. 受験までに、学習指導要領に示された学習内容を終了させることが困難である。

高等学校においては、物理、政治経済などの科目のように高校三年生になって初めて学習する科目がある。現在でもセンター試験に間に合わせるため1年間で学習する内容を相当圧縮しながら指導している状況にある。これがさらに1か月前倒しになると本来学習すべき時間の三分の二程度しか学習できずいわば未履修状態でテストを受験することになる。

また、少しでも有利な状況で受験させようと学習指導要領を逸脱する教育課程を編成したり、実験や実習等を含むアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業を削減したりするなど、今回の教育改革の方向に逆行するような動きが出てくるのが危惧される。

2. 多様な教育活動を十分行うことが困難になる。

今回の大学入試改革では、高校生の多様な教育活動の成果を評価するよう大学入試を改善する方向性が打ち出されている。しかしながら大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の実施時期が1か月前倒しになると、その準備のために、学校行事の時期を早める、学校行事への三年生の参加を取り止める、部活動を実質二年生で終わらせる、などの対応を取る学校が多くなることが予想され、これまで実施してきた多様な教育活動を縮小せざるを得ない状況が生じる。

現在、多くの学校では文化祭・体育祭が9月に開催されている。また、運動部ではラグビー、サッカー、バレーボール、バスケットボール、陸上（駅伝）等、文化部では合唱、吹奏楽等の全国大会が10月から1月にかけて行われ、その予選である地区大会は8月下旬から11月にかけて行われており、多くの三年生が高校生活の総決算としてこれらの行事や大会に参加している。

これまで日本の高等学校は、学力をつけることと並行して部活動や学校行事を通して人間形成を図ることを目的として教育活動を行ってきた。高校生を取り巻く環境の変化により、人間形成を図る場としての高等学校の役割がこれまで以上に重要となってきた。多様な教育活動ができる環境を確保していただきたい。

3. 経済格差が教育にもたらす影響が拡大する恐れがある。

テストに対応するためには、先取り学習をすることが有効であるという考えから、学校以外の教育機関等を頼る傾向が強まっていくことが予想される。その結果、経済的に豊かでないで大学進学は難しいという状況が生まれ、経済格差が教育にもたらす影響がこれまで以上に拡大する恐れがある。

本協会大学入試対策委員会が今夏に実施したアンケート調査では、記述式を含め「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を現行の大学入試センター試験と同じ時期に実施してほしいという回答が大多数であった。また、記述式問題の導入により現行の教育活動に制約が生じるという回答も多く寄せられているなど、今回の大学入試改革への不安が大きいことが明らかになっている。

大学入試改革の必要性、改革の方向性については本協会も十分理解しているところである。今回の改革が、高等学校教育にとってもより良いものとなるためにも、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の実施時期を、現行の大学入試センター試験と同程度の時期にさせていただくことを強く要望する。